

---

# 風先案内人

住友優大

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

風先案内人

### 【Nコード】

N8171D

### 【作者名】

住友優大

### 【あらすじ】

失恋に嘆く、一人の少年の魂の行く末は・・・人の原点はどこにあるのだろうか？そんな疑問を追及する。

## ブローグ

「突然だけど別れよっか」

彼女の携帯から僕に唐突に吐き出されたその文字は、僕に何を与え何を取り去っていったのだろう。

学校の卒業式や職場の転勤・異動の時のそれと文章で書く漢字は同じであるけれど、恋人同士の『別れ』は違った重みがあるような気がしてならない。その重さは人によって、また場合によって違っているはずである。

今日の何日か前だったか、ふと感じた予兆のようなもの。

「本当に彼女は僕が好きなのだろうか、いや、もしかしたらそれは偽りなのかもしれない」

第六感ともいうべき心のメッセージ。動物が地震を予知するといふことは一般に広く知られているが、人間もそんな能力を持っているんだと思う。ひとそれぞれ違った形で、違った物事を予知する能力が。

そして今、この瞬間。第六感のメッセージが本物になった時、僕は別れの重さを心ではかっている。計測の結果は『心』を貫く痛みで表される。

「君は悪くないから」

携帯電話の液晶にはこんな記号が映し出されている。文字なんかでない羅列された感情を持たない記号。僕は頭が悪いから、状況をすぐになんかのみこめやしない。しばらくたってなんとなく理解するのが精いっぱいだ。

よってそれ以上読まずに携帯の画面をそっと閉じる。

幸いなことに、真夜中の自分の部屋だから家族に知られることは

ないし、明日までに少しは気持ちの整理が付けられるかもしれない。こんな時世間一般では『悲しみ』という言葉が多用されるけれど、そんな簡単なもんじゃない。

あくまでこれは僕の場合だが、そこにあるのは、後悔が大半である。

「あのとき、こうしていたらな」

そんな言葉を毎日呟いている。その延長線上にあるのが今回の『別れ』である。

うまく説明はできてない、むしろうまく説明できない類のものなのかもしれない。

また自分の中では地球がひっくり返るよりも重大な事件だが他人や社会にとっては何ら価値を持たない事項である。

よって共有は不可。ただし、いくら悲しむのも自分の自由。

部屋の窓から見える一晩中眠らない国道に向かって叫ぶのも結構。帰宅途中に川沿いの公園で一人泣くのも結構。

僕の場合は夜にひたすら泣いて、昼間は精一杯元気に、明るく過ごすという二重人格生活を最低半年いそしむことになる。

昼間に悲しみのようなものを蓄積しては、深夜に涙としてそれを排出する毎日。

そんな生活に楽しさという感情一切ない。だから休日は『腑抜け』もしくは『無気力』といった状態になる。これが初期の状態。

こんなで長い時間を過ごしていると、やがて神経がまいってしまつて、自虐に陥る。そしてたった一つの願望が徐々に生まれる。

「死にたい」

ただそれだけ。想いはここまで変化する。

あれからちょうど2カ月後のある日、僕は家に帰ろうといつもの細い住宅街を抜ける道を駅へと歩いていった。

空はトンボ色に染まり、マンシヨンの前に景観保護のため強制的に作られた緑地の木の葉がゆっくりと揺れている。

ここのところめまいがひどい。何が原因かは不明だが、何らかの治療が必要なことは分かっていた。

大きな道に出て交差点を渡り、さほどきつくない下り坂を下って駅の改札を抜ける。各駅停車しか止まらないこの私鉄の駅は朝の通勤ラッシュ時を除けば利用客も少ない。また、次の駅が乗り換え駅で先頭車両停車する先にしか出口がないために、ほとんどの乗客は先頭車両に乗るべくホームの前に並んでいる。

ふらつく体を気力で動かして、人を避けるようにしてホームの後方の柱に手を掛け、電車を待つ。

暗くなりかけの線路の上を6両編成の電車が近付いてきた。

「キヤアー」

突然、叫び声が聞こえた。とっさに左前方の線路上にランドセルをしまった小学3年生ぐらいの子供がうずくまっていた。

電車までの距離はもうほとんどない。ホーム上にいた駅員が列車の非常停止通報ボタンを押そうとしていたがそんなもので到底間に合ったものではない。

「危ない」

次の瞬間、僕は鞆を投げ捨て線路に飛び降りて猛烈な勢いで子供を抱えホームへと投げ込んだ。

列車の警笛とブレイキの凄まじい音が鳴り響く。この駅にはホーム下に退避スペースがなく逃げ場はなかった。

「ああ俺は死ぬんだな」

死にたい。とは思っていたがこんな形で死ぬなんて。自殺するよりはよっぽどましかもしれない。失恋に嘆く男が一人生きるより、夢と希望を持つ子供が一人助かった方が遙かに、そう遙かにマシなはずだ。

6時間後。国分俊はいや少なくともその体は、聖路病院の集中治療室に横たわっていた。医師による診断は複雑骨折および頭部損傷で容態は意識不明の重体。

家族が既に呼び出されて、よほどの奇跡が起きない限り、二度と目覚めることもなく、この状態が維持できるかどうかも定かではないということ被告知られた。もって1か月。早ければ今にでも。死の影は迫っている。

田中は迷っていた。この意識不明の少年に3日間の猶予を与えるかどうか。

日本国では、古来より霊は案内役に連れて行かれ、俗にいう天国または地獄に赴くことになっている。たまに俗世で霊能力者を名乗る人がいるが、それは案内役との会話ができるだけであり、霊本人と直接話せるわけではないのだ。ちょうど日本の総理大臣がアメリカ大統領と通訳を通して話すような感じである。

案内役を見失えば、霊として俗世において永遠にさまようことになる。ちなみに案内役は裁判員のように霊のなかから無作為抽選。300年に1回ぐらいの割合で回ってくる。

案内役の田中には様々な特権があった。まず、どこに連れていくか天国でも地獄でもどこでもいいのだ。次に、タイム。無念の死を遂げたと認定したもの、または意識不明の重体となっている者に対して、執行猶予ともいうべき時間を与えることができる。義務はたった一つだけ。霊をどこかに連れて行って、「ここまで連れてきてもらってどうもありがとう」という意味の言葉を言ってもらっただけ。その時点で任務は終了。報酬もある。

タイムをもらった霊は、俗世を冒険し時間内なら、3回までちょっとした行動を起こすことができる。

俗世でいうラッキーというやつである。たとえば、試験中適当に選択肢ウを選んだら正解だったとか、信号がなぜか全部青だったとか、お金が落ちていたとか・・・枚挙にいとまがないがそんなようなことの大半はあの世に行く前の霊のちよつとした善意である。

「国分俊君ですね？私は今回案内役に抽選された、田中です。太平洋戦争中、空母赤城の厨房を担当しましたが、ミッドウェー海戦って知っておりますか？そうその海戦でアメリカの爆撃機の爆撃が

直撃して、天国で小さなレストランを開くことになりました。」

「何を言っているのかよくわかりませんが……」僕は困惑した顔で田中を見つめた。

「あ、失礼しました。あなたは、つい先ほど、線路に転落した小学生を助けて、そのまま電車に轢かれ、意識不明の重体になっています。よくあの世行きなん言いますよね？3日後あなたはそのあの世に行くことになっています。もちろん私が責任を持ってご案内いたしますから、心配なさらないください。」

田中も緊張していた。自分が死んでから約60年。案内役はもちろん初めてであつたからだ。

意外にも僕の心の中では、すんなり受け入れられた。そして田中に、

「わかりました、どうぞよろしくお願い致します。」  
と、丁寧にあいさつした。

田中は決心した。この少年に、3日間のタイムを与えよう。こんな年で死というものを的確に理解し受け入れているからには、何か悲惨なものを背負っているのだろうと判断したからだ。限られた時間を無駄にはしたくないので、さっそく説明を始めた。

「国分くん、あなたには違う世界、すなわちあの世に行くまでに約3日の猶予を与えることになっています。体は動きませんが、自分自身の意識とともにどこへでも移動することができます。どこか行きたいけど、場所が分からないところがありましたら私も常に一緒にいますから、気軽に聞いてください。あともうひとつ。基本的に俗世の人間と接触したり、話したりすることはできません。しかし、見えざる力……その超能力のようなものですが、霊の持つ不思議な力を好きな時に最大で3回まで使うことができます。やり方は簡単です。心の中で起こしたいことを三回唱えるだけです。言葉にする必要はありません。」

「そんなことができるんですか？」

僕は啞然としてそれ以上の言葉を発することができなかった。死ん



だら何も残らず、何もかもが空白になるものだと思っただからだ。死んでからの世界。本当にそんなものがあるのだろうか？いや、もう死んだのも同然なんだから、今は信じよう。

田中が黙ってこっちを見ているの僕から提案をした。

「今日はもう夜ですから、明日からの行動開始ということでしょう？時間あまり無いのはわかりますが、行きたいところなど気持ちの整理をつけたいので・・・」

「よいでしょう。では明日の午前8時にお迎えに上がります」

その夜は何とも不思議な気分だった。意識と視界ははっきりしているが、自分の手はない。いや、体はベッドに横たわっている。口には何本ものチューブが入っている。こうして見ると本当に他人のようだ。

あの駅から、案内役の田中という人物に会うまでの記憶はない。しかし今はこうして意識もはっきりと物事を考えることができる。音も聞くことができる。集中治療室だから、医療機器の音しかないが・・・。

本当に死ぬんだ。一晩できちんと気持ちに整理をつかられるだろうか。いままで、何をしてきたのだろう。その意味をこの3日間の間ではたして見つけることができるのだろうか？

「本日も大東亜航空をご利用いただきまして、ありがとうございます。この便は、新東京国際空港を出まして、中部国際空港を経由いたしましてオーストラリア・シドニーまでまいります。間もなく離陸になりますのでシートベルトをお付けくださいませ」

飛行機に乗るのはこれが初めて。今日から家族と一緒にオセアニアの島嶼へ旅行。

父親の部長昇進祝いも兼ねてだけど、家族での旅行も久しぶり。第一、親同士がまともに顔を合わせて話しているのだって、何かのアイスのハート型を出す確率のような希少価値があるし。

「沙希、シートベルト・・・ちゃんと締めなさい」

あー、もううるさい。これだから嫌なんだよな。

沙希はしぶしぶといった感じでシートベルトを締め、右手前方にあるモニターに目を移した。流石ファーストクラスである。一人ひとりの座席はほぼ独立しているし、自分の好きなテレビや映画など

が見れるモニターまでご丁寧についている。

チャンネルを回していなかったし、まだ日本上空ということもありモニターには夜のニュースが映っていた。

沙希はすぐに映画にしようとしたが、見なれた駅がふと目にとまった。

「今日、神奈川県湘南市にある湘南高速鉄道江ノ島線の藤沢台町駅で、人身事故がありました。線路に誤まって転落した小学生を助けようとして飛び込んだ、近くの高校に通う少年が意識不明の重体となっています。」

なお、小学生は軽いけがのみで命に別条はないとのことでした。

また人身事故か。まあ自殺じゃないからよかった。めでたしめでたし……。

いつも使っている駅をテレビで見るなんて

なんだか変な感じ。

もしかしたら意識不明の少年知ってるかも。ま、向こうに着いたら誰かにメールしてみるか。

飛行機は徐々に高度を上げ、もう今はちょうど湘南市の上空一万メートルを飛んでいるところだ。

今までの自分の人生。そんなことがたった一晚できれいさっぱり整理されるのだろうか。

と、次の瞬間「風」を感じた。

風……。風だけはいつも僕の味方だったような気がする。

いつも無言で語りかけてくれる、色も何も無い風。

そこには無の優しさというものがある。何事をも包み込む、さわやかさをひきつれて。

最期になるなら、風を感じてあの世に行きたい。どうせなら海がきれいなところがいい。沖縄いや願わくば海の青く綺麗でサンゴ礁が見られて……スキューバダイビングを楽しんで。そんな生活をするのが俊のちょっとした夢だった。

「沙希、明日はどこに行こうか？」

「えー？うーん。やっぱり・・・恥ずかしいから遠くにしよう。近所のショッピングセンターじゃ誰かしらと会っし・・・そうだと参道。二人で歩いてみない？」

「よし、分かった。もちろんロマンスカーで行くぞ、どうせ料金はＪＲで行くのとあんまり変わらないんだから」

二人のデートと言えばロマンスカーで行く東京。ちょっぴり大人びた街を二人で巡るのが何だか楽しかった。

いつもどこに行くか迷って何時間も話し込んでしまう、駅前のビルの奥にある喫茶店。あそこブレンドコーヒーの味は少し苦めだ。

新宿駅に着くと、二人は手をつないで丸ノ内線のホームに向かう。そこからどこへでも行ける。二人でいるなら、そう無限に広がるお互いへの想いと共に。そんな気がしてた。いつだって、いつだって手をつなぐとなんだか不思議と顔がほてってしまふ。恥ずかしさとはちよつと違った感じもする。何とも言えないこの感じのことを世間では幸せとでも言うのであろうか。

幸せはするいやつだ。悲しみを助長する。これは塩と砂糖の関係に少し似ている。塩を単独でなめてもちろんしょっぱいが砂糖をなめた後に塩をなめると前者よりもしょっぱく感じるのと同じように。

ただ単に悲しみよりも、幸せの後の悲しみの方がより傷は深い。幸せが大きければ大きいほど悲しみを大きくするんだ。

あの時にはもう戻れない。生きていれば、もしかしたら仲直りを・・・なんて希望も持ててくはない。しかしもう自分はこの世の人ではない。いや正確にはあの世とこの世の中間ぐらに属しているのかもしれないが、大差はないであろう。

病室は大分高い階にあるようだ。窓からは駅前の高層マンションと星空しか見えない。

沙希はいつたい今頃、どこで何をしているのだろう。

それを、知るすべはない。僕に今できるのは、彼女の幸せをささやかに祈ることだけだ。

『辛い気持ちで溢れても

いつでも笑顔を絶やさずに

明日はいいことあるはずさ

信じて今日の日乗り越えよう』

『故郷の空』という曲の一番の歌詞だ。沙希とのデートの帰り道、必ず通るあの交差点。歩行者用信号が青になると鳴り響くあのメロディ。『通りゃんせ』や『鳥の鳴き声』とは違うあのどこか懐かしいメロディ。

気がつくとは俊は泣いていた。いや、体で泣いていたのではなく、心で泣いていた。彼の悲しみの蓄積はあの世とこの世をさまよいながら今も行き場を失っているようだった。

機内食はまあまああってとこ。飲み物がちょっと残念かな。何しろファーストクラスというのは大人用の最古級サービスを提供する場であって、それ故飲み物はほとんど、コーヒーとフレッシュオレンジジュースとお冷以外はアルコール。ナポオンとやらなんやらを飲んでみたかったのにまだ未成年だし。残念、残念。

窓をそつと見ると、そこには雲と暗闇。今は太平洋のどこかをフライトしているのかな。

さて、もうねよ。せつかく明日からリゾートが待ってるのに。寝不足はお肌にも悪いって言うし。ま、別にそんなことはいいいんだけど。

とにかくおやすみ・・・。

その時、カーテンの隙間から綺麗な星空が一瞬だけ見えた。

沙希の頭にはある人物の顔が浮かんだが、自らその残像を消し去り、目をつぶり眠りについた。

田中は役所で調べごとをしていた。この世で言う税関とも言つべきこの役所では、これからあの世へと導く人の生前の行動などが簡潔にまとめられデータベース化されており、案内人だけが認証され読むことができる。

国分俊は数か月前に彼女に振られていたとか、中学校時代の活動とか、挙句の果てにテストの点まで。一度見ただけでは覚えられる量ではないが、これからの旅において一度は眼を通しておかなくてはならない資料であった。

その中の一つが田中の眼を引いた。

「この世の中に立ち向かう、

正義のヒーローにはなれないけれど、

風になりたい。

春にあの人をやさしく包んでいくような。

夏にはさわやかな。

秋に実りをもたらし、

冬に暖かさを恋しくさせる。

そんな風に」

風になりたいか・・・。

生前の俊のブログのある日の記事。彼女を失った悲しさからか。国分君がもし、場所の希望を出さなかったら、風をキーワードに場所を提案すればよいか。彼には悲しみを癒す風が必要のようだ。田中は手帳に『風』と一言かいて役場を後にした。

「三番ホームご注意ください。参ります電車は当駅止まりです。この電車は折り返し、急行、新宿行きとなります。」

はぁ。やっと来たか。まったくよく遅れるもんだよ。ホント勘弁してほしい。今日が金曜日だから、まだいいとしてもこれはひどい。午後に藤沢台町で起きた人身事故のせいで、まだ電車が遅れている。ホームは帰宅途中のサラリーマンでこった返し、駅員は雑踏の中苦情への対応に必死になっている。

源田は帰宅を急いでいた。妻が産婦人科の病院に入院中なのだ。むろん携帯で連絡を取りたいところだが、午前、午後の外回りで電池を消耗しきってしまった。

ま、こうなったらゆっくり帰宅するしかありませんな。片手に缶コーヒーを持ちながら、列の最後尾に並んだ。

「藤沢、藤沢。ご乗車ありがとうございます。東海道線、鎌倉電鉄線はお乗り換えです。」

電車の中に入るとクーラーが入っていたようで、車内は少しひんやりとしていた。

どうしてこのような結末を迎えなければならなかったのか・・・。沙希。教えてくれよ。あのメールだけじゃわかんないって。自分では精一杯に沙希のことを考えていたつもりだったし。話合いとか、そういうのはなし？あまりに突然に・・・うーん他に好きな人ができたとか？



答えは依然と見つからず、結局は自分の何かが悪かったのだという  
あいまいな結論になるのがいつものパターンだ。

相も変わらず今日も同じ。あの世とこの世をさまよっていても、  
思考だけはある意味正常のようである。

泣いたおかげで少し気分がすっきりした。

日付が回ろうとしている。普段ならそろそろ寝る時間だが、今日  
は眠くならに。興奮しているだろうから、それともこういう中途半  
端に生きてる状態では眠くならないのだろうか。

田中さんにその辺をもっと詳しく聞いておけばよかったと少し後悔  
した。

「本日も小田急をご利用いただき、ありがとうございます。急行新宿行きです。只今始発の藤沢駅を25分ほど遅れて発車いたしました。この先の停車駅は、湘南台・長後・大和……」

ふー。ようやくこれで今週も終りか…。

並んだ甲斐あって、座れた源田は少し穏やかな気分になっていた。金曜日のこの解放感がなかったら大方の人が過労死してしまうことだろうと自分では勝手に思っている。もちろん、土曜日や日曜日も出勤することもあるのだが…

人間なんていうものは、思いこみでどうしても変わるものなんだろう。

「明日は休み」

そんな思い込みだけで精神的には安堵するのだから。

「みなさま、おはようございます。本機は只今オーストラリアのタウンズビル市上空を飛行中でございます。目的地のシドニーまではあと1時間ほどで到着いたしますので朝食をご希望のお客様はお早めにお申し出ください。」

やわらかいアナウンスコールで目が覚めた。

気がつけば窓から日差しが差し込んできている。なんか遠くに来たって感じ。

沙希は掛けていた毛布をたたみ、洗顔を済ませ、英語でしゃべらなくてはならないかと緊張しつつキャビンアテンダントの人を呼んで、朝食を頼んだ。親はまだ二人ともぐっすりだ。

「お客様。お飲み物はいかがいたしましょうか？」

日本語で訊かれ、沙希はほっとした。

「果物のジュースがありますか？」

「はい、オレンジ、グレープフルーツの二種類をご用意しております。」

「じゃあ、グレープフルーツで」

グレープフルーツって好きなんだよね。オレンジジュースとは違う・・・なんていうか大人っぽいつて言うか、あのちょっとしたほろ苦さがね。コーヒーが飲めないから喫茶店とかに行つたとしてもきまつてジュース。

そうこうしているうちに朝食が出てきた。

なんだか分からないものが多いが、とりあえず洋食のようだ。

「じいちゃん、もうこっち側は鍬を入れたけん、大丈夫だからすわつてくれえ」

「おう、頼んだ。こっちはトマトさ取らねばなれねえ」

亮太は母方の祖父の家に前日から泊つていた。

早いものでもう日の出の時間になりそうだ。

ちよつとした丘に位置するこの畑からは、朝日がよく見えるし見晴らしは最高。ただし蚊が多いからずらんテープを工夫して蚊取り線香をどうにかしてベルトの部分に装着しないと勝ち目はない。負けたなら体中に赤いボタンのようなかゆみの種をつくることになる。

畑仕事を手伝うのは決していやいやではない。むしろ日頃の自分らしきものになつてゐる間に比べたらよほどこっちの方がすがすがしい。自然体とはこういうことなんだろう。

確かに土はしゃべらないし、じいちゃんには若者言葉は通じないかもしれない。でも、竹やぶから吹いてくる風は癒しを与えてくれるし何より緑が心を穏やかにしてくれる。何も考えなくてよいのだから。人間関係や陰謀裏を読んでの行動。すべていらないのだ。

今呻っているこの場所はつい先日まで馬鈴薯が植わっていた。秋

からは大根を蒔くから今のうちに肥料を入れて寝かしておくことが肝心だ。

小・中学生時代は感じなかったことだけど、少しはこういう手伝いをしなくては気が済まない。じいちゃんだって永遠に元気にいるわけじゃないし、大人になればもっと多忙になって帰ってくることもすらできなくなるかもしれない。同級生にこんな畑仕事やってるやつはいないが、自分は自分だ。

無言で作業をしていると考え事が多くなつて困る。

「そろそろ水まいてけえんべ」

「うん、そうしよう」

田中は八時きっかりに国分の病室に表れた。

「国分君、おはようございます。田中です。行きたい場所決まりましたか？」

「あ、いえ、そのーできれば空が青くて風が気持ちい場所に行きたいんですけど・・・それじゃあ抽象的すぎますかね？」

「いえ、大丈夫ですよ。風ですか・・・風の街というとメキシコの首都メキシコシティーやシカゴなどの街が有名ですが他に観たいものもありますか？」

「そうですね・・・サンゴ礁と綺麗な海があれば理想としては完璧なんですけど」

「ちよつと待って下さい、今調べますから」

僕はいま起きていることが現実なのかそれとも夢のような形のな幻想なのか判断がつかなかった。田中さんはもう現れないのだと少し思っていたし、これは実はすべて夢で目覚めたら自宅のベッドだったなんてオチだろうとわずかではあるが考えていたからだ。

「国分君、バナアツはどうでしょう？オーストラリアの近くにある島国ですが、まだ開発もされていませんし綺麗な海、サンゴ礁、そして何より風がよく吹いています」

「それで、お願いします」

バナアツ。どこかで聞いたことがある国名だ。何でだったかはどうしても思い出せない・・・。

沙希の様子が少しおかしいと感じたのはこの旅行が始まってからだ。

部長に昇進してからというもののプロジェクトの引き継ぎやらなんやらでとにかく忙しく、当然のことながら帰宅時間は毎日日付が変わってからで終電に乗ればよい方だった。そんなすれ違いの生活が多かったから久しぶりに長い時間を一緒にいることに対してちょっとした違和感を覚えたただけなのだろうか。いや違うだろう。どこことなく大人びているというか、大人しいというか。思春期の娘とはこういう複雑で分かりにくいのが普通なのかもしれないが……。少し様子を見てみるとするか。

荷物が税関と入管のベルトコンベアーを流れている間、沙希の父はそんなことを考えていた。人間は暇なときふとしたことに気づくことがある。第六感なのか野生の感なのかは定かではない。

オーストラリアって意外と近いな。今日はホテルのプールでいっぱい泳いでやるんだもん。飛行機中ってじつとしてなきゃいけないからホント退屈だったし。

沙希は気付いていた、ある問題を回避している自分。考えたくないことは考えないのが一番なんだと、無理やりに納得させている自分を。楽しさと時が不必要な記憶を忘却してくれることを彼女は期待していた。

空港によくありがちな、光の差し込む開放的なラウンジ。隣にはカッコつけてるんだかしらないけど、似合いもしないサングラスをかけている父、明らかに面倒そうな不機嫌な顔をしている母。飛行機の乗り換えの待ち合わせ時間は20分ちよつと。

沙希は友達に機内で気になっていたことをメールをした。

「亮太、久しぶりー今旅行でオーストラリアなんだー。ちょっと聞きたいんだけど、台町の駅で飛び込んだ人って知ってたりする？新聞かなんかで見たら教えてくれんないかな？あ、全然急がなくていいけど。んじゃよろしくー。」

乗り換えた飛行機はひどく小さかった。日本国内の島嶼を結ぶ路線によくありがちな、揺れがひどい飛行機とよく似ているような気がした。

離陸するときの音もすさまじい。両親は前の座席に座っていて、私は一人だ。座席は二人掛け。つい最近まで隣にいたべきだったあいつとはもう二度と隣の席になんかなることはないだろうな。頭にふつと湧いて出たその感情が意味すること。飛行機内なので携帯電話の電源は切られている。しかし、何とも落ち着けない。そんな自分が嫌で外に目を向けると、そこにはベルリンブルーの青空がひろがっていた。

（6へ続く）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8171d/>

---

風先案内人

2010年10月22日10時12分発行